

「インターネットの活用による『外国語ベーシックⅠ』の授業改善」 プロジェクト報告

齋藤 陽一・駒形 千夏・番場 俊

1. はじめに一音を聞き、音で答える

「インターネットの活用による『外国語ベーシックⅠ』の授業改善」と題された本プロジェクトは、平成16年度に新設された外国語ベーシックⅠの受講者に、自習用の補助教材を作成することを目的とするものである。当初予想していた人数を大幅に上回る学生がこの科目を聴講することとなり、もともと100名規模のクラスがさらにふくれあがった。また、授業の形式として一外国語5回というのが原則であるので、そもそも学習中の外国語の音声に触れる機会は少ない。そのため、コンピューターに向かえば、いつでもその外国語に触れることができるという環境を作り出すことが急務となった。それは、学生によっては、3外国語の初歩を学ぶ「外国語ベーシックⅠ」終了後、そのうち一つの外国語をさらに深く学ぶ「ベーシックⅡ」を聴講することになるため、夏期休業中、或いは、第2学期における復習用教材としても必要なものとなった。

このプロジェクトが構想されるには、一つの報告が先行事例となった。今回の責任者である齋藤（人文学部、ロシア語）が、『大学教育研究年報』第9号に書いた報告、「WEBを利用した語学教材の提示」がそれである。ここでは、現在のベーシックⅠにあたるクラス（理学部、工学部向け）において、補助教材として、WEB上に、日本語を見てロシア語の単語を答える問題を置き、その際にクリックすればヒントとしてその単語の音声を知ることができるというサイトを製作したということについて報告した。現在では、特に音声については、著作権に絡む問題でもあるので、授業時以外には使えないようにURLは公開していないが、その後、ある課の単語が常に同じ順番で出てくるというタイプだけでなく、任意の10単語がアト・ランダムに出題されるという形式も考案した。また、筆者は、秀丸というエディターを利用しているのだが、ロシア語の単語と日本語訳を1対1に対応させたファイルを用意すれば、簡単にWEBサイト用の問題を作成できるというマクロを組んだので、関心がおありの方は、ご連絡して頂きたい。尚、筆者がロシア語教員なので、ロシア語の問題を作っている訳だが、英語の単語問題にも応用できるということは言うまでもない。

話が若干、横道にそれたが、今回は、ロシア語に留まらず、初修の各外国語で、アルファベットの読み方、あいさつの言葉などを、クリックすれば聞くことがで

きる、或いは、映像付きで聞くことができるという環境を作ることを目指した。以下、その際の手続きについて具体的に述べるが、その担当は、「外国語ベーシック」の様々な取り組みについて、番場俊氏（人文学部、ロシア語）が、WEB教材作成の実際を駒形千夏氏（人文学部、フランス語）が書き、最後に齋藤が、来年度以降の見直しについてまとめたいと思う。

2. 「外国語ベーシック」という講義は何を目指すのか

「外国語ベーシックⅠ」は、クラスによっては100人を優に超える学生を相手に、各外国語5コマで当該外国語の入門を講義するというきわめて新しい形態の授業であり、平成16年度は、入学者数合計2,204名のうち1,233名、平成17年度は、同じく2,298名のうち1,274名が聴講を希望した。学部科目の時間割やクラス編成の都合で、実際の聴講者数は1,388名（平成16年度）、1,426名（平成17年度）にのぼる。

しかしながら、この講義をどのように進め、どの程度の内容を教授するかについては、当初、ほとんど手探りの状態であったと言わねばならない。社会全体における英語重視の流れのなかで、初修外国語に対する学生の学習意欲がそもそも減衰しつつあるという危機感が根底にあるために、講義内容を考える際には、そもそもなぜ大学において初修外国語教育をおこなうのか、そこにどのような教育意義を見出すべきかという、いわば根源的な問題に直面せざるを得なかったのである。入学時に一外国語選択に迷っている学生に対し、複数の外国語を概観し、言語と文化の魅力を紹介するというのが大まかに言ってこの講義の目的ではあるが、かつてのように外国から来たものであれば何でもありがたがる風潮がすでに消えうせている今日、そもそも外国の「言語」と「文化」の魅力とは何であり、学生が学ぶべき「言語」と「文化」とは何かという問いは、個々の教員が改めて自問すべき問題としてあった。また、中国語、朝鮮語、スペイン語、イタリア語、エスペラント語、文字論においては、過去にこの講義の前身である「言語文化基礎」(ドイツ語、フランス語、ロシア語)を経験していなかった。

外国語ベーシックⅠの講義内容をどのように組み立てるべきかという問題は、新潟大学の初修外国語カリキュラム体系のなかでのこの講義の位置づけとも絡ん

で複雑になっている。現行カリキュラムでは、この講義の終了後、学生は、引き続き第2期に開講される各外国語ベーシックⅡ（3単位）を履修することも、また、この講義だけで初修外国語の学習を終わらせることも可能になっている（必修単位数の多い農学部の学生は別）。実際には、平成16年度には外国語ベーシックⅠ受講者のうち31%、平成17年度には32%の学生が、第2期にベーシックⅡを受講している。この数字をみるかぎり、外国語ベーシックⅠを、単に第2期のベーシックⅡの導入授業とのみ考えることはできないことは明らかである。外国語ベーシックⅠは、1 Semester 週1回30時間で一つのまとまりとして完結した内容を持たねばならない。言い換えれば、各外国語につき5回の授業だけで、その外国語についてなにがしかの知見を得ることができ、その外国語について学んだ意義があったと思わせるような講義をおこなわなければならないのである。そのための工夫は、大げさに言えば、いままで初修外国語担当教員が直面したくない問題であった。

このような困難な課題に対するここ2年間での各教員の解答は、当然ながら様々であり、初修外国語部会としても教員相互のサポート体制をつくりあげる必要があった。そうした試みの一つとして、平成16年7月14日（水）の2限終了後におこなわれた外国語ベーシックⅠ懇談会がある。金子一郎（ドイツ語）、木村豊（ドイツ語）、逸見龍生（フランス語）、番場俊（ロシア語）、藤石貴代（朝鮮語）、近知弥子（スペイン語、非常勤）、猪俣賢司（イタリア語）、山崎幸雄（エスペラント語）、高橋秀樹（文字論）が出席したこの懇親会では、実際に講義で使用しているテキストや各教員が独自におこなったアンケート結果を持ち寄り、自由な意見交換がおこなわれた。以下では、そこで明らかになったいくつかの問題点と、平成16年度から17年度にかけて整備されていったWeb教材開発の試みのなかで浮かび上がってきた問題について報告し、あわせて、この項目の執筆担当者（番場）による試みを紹介する（以下の記述はすべての外国語の試みを均等に紹介するものではない。とりわけエスペラント語と文字論に関しては、筆者の知識不足もあってほとんど触れられなかった。この点、ご寛恕願いたい）。

1) 文化か、言語か？

外国語ベーシックⅠの講義内容を構想するうえでもっとも基本的な問題点となったものがこれである。もとより「言語」と「文化」は截然と分けられるものではないし、ほとんどすべての教員が両者のバランスを考えて講義を組み立てていたことは間違いない。例えば、気づかないうちに毎日の生活に入り込んでいる外国語の語彙（ドイツ語Arbeit、イタリア語spaghetti、スペイン語uno、ロシア語украなど）を指摘し、その外国の文化を身近なものとして感じさせようとする

試みは多くの講義でおこなわれていたし、その国の映画やテレビや音楽の紹介もほぼ共通に見られた。他にも、パソコンにハングルを表示させる操作を教え、インターネットを通して韓国・朝鮮文化に親しむ機会を作る（朝鮮語）、ダンテの『神曲』の冒頭3行を原語で暗記させ、いわば身体ごとイタリア文化に馴染ませる（イタリア語）など、ユニークな試みが見られた。

しかしながら、発音および初等文法を重視する授業と、その言語が使用される国の文化や文脈の紹介により重きを置く授業の二つの傾向があったことは事実である。その双方の試みをおこなったのはフランス語の逸見龍生助教授であり、フランス語・フランス文化を重視した講義と、初歩的なコミュニケーション能力獲得を重視した講義を、年度を変えておこなった。前者においては、(1)「国際語としてのフランス語」という観点を重点的に講義することで、外国語といえばまず英語をフレーム化する学生たちの前提を、言語史的観点から相対化し、(2)「国際語」という概念のもつ両面性を植民地化の歴史をふまえて説明することで、政治的・経済的・社会的な一言語支配の問題点に注意を喚起し、(3)さらにはフランス語の枠をこえて、国際語という概念の対極に位置づけられるものとして、第二次世界大戦後の危機言語の実態に触れる、といった試みがなされた。こうした講義に対する反応として、「世界の言語がたった一つだけだったらコミュニケーションが容易に取れて素晴らしいと考えがちだったが、報道の偏りを振り返ってみてはっとする思いでした。多様なものがあるからこそ豊かなのかもしれないと思いました」とか「この授業を受けるまでは、英語さえ勉強すればよいと考えていたが、他の言語も大切にしなければならぬ、それが文化を守ることにもつながっていくと思った」といった感想が寄せられている（アンケート結果より）。こうした学生たちの感想は、大学において初修外国語を学ぶことの意義を、あらためて指し示しているように思われる。しかし、もちろんのことながら、こうした文化論中心の授業に不満をもち、もっと文法や発音を教えてほしいという学生もみられた。

「文化か、言語か？」という問題は、ついに解決することのできないものとしてあると言うよりほかない。フランス語がフランス以外でも使われていることを知らずに文法の暗記に励むのもナンセンスであるし、英語中心主義に対するフランスの国家的防衛政策について正確な知識を得ていたところでフランス語の綴り字の規則について知らないのでは話にならない。各外国語5回の講義のなかで両者のバランスをいかに取るべきかについては、今後も引き続き検討すべき課題でありつづけるだろう。

2) 内容の共通化か、多様性か？

各学生が1 Semesterで3つの外国語を5コマずつ

学ぶというこの講義の形式に鑑みて、各外国語で学ぶ内容を共通化し、さらには決まったテキストを作るべきではないかという意見も少なからず見られた。「1」からも想像がつくように、現状では各外国語が5コマで教えている内容には少なからぬ差がある。文化重視の講義では当然ながら教えることのできる発音・文法事項は減るだろう。また、英語とほぼ同じアルファベットで対応できるドイツ語その他と、まったく違う文字を一から覚えなければならないロシア語では、文法の進み具合には少なからぬ差がでる。しかしながら、そのような差異をふまえたうえで、なお、外国語ベーシック I 全体で講義すべき最低限の共通事項については、合意しておくべきだという意見であった。

この問題についても、まだ最終的な結論に至ったわけではない。授業で使用するテキストについても、年度によって異なる担当者の創意工夫を重視すべきだとの意見から、作成にはいたっていない。しかしながら、副教材としてのWeb教材作成の段階で、講義内容に関するある程度の合意は得られつつある。すでに述べられているように、現段階ではWeb教材には様々な問題があり、全面的な活用には遠いが、その作成過程で、外国語ベーシック I のあるべき姿に関する議論を深められたことは大きな収穫であった。文字、いくつかの挨拶、初歩的な文、それに文化の簡単な紹介に関しては、すべてのクラスで共通に教えられるべきものとして合意されている。このような努力により、三外国語を学ぶ学生は、共通の視点からそれぞれの言語と文化の特徴を把握することができるようになるだろう。

3) どこまで覚えさせるか？

「2」で述べたような最小限度に関する合意が得られたとしても、なお、そのうえにプラスとして教えるべきものは何か、どこまで暗記させ、試験に出すべきかという問題は、個々の教員が考えるべき問題として残る。ここでは、この項目の執筆者（番場）が平成16年度に担当したロシア語の事例を紹介する（ただし、平成17年度にこの授業を担当した齋藤陽一教授はまた異なった授業をおこなっていることを、あらかじめお断りしておく）。

従来の初修外国語教育の枠組みで考えれば、初等文法の最初の5回で講義できることは自ずと決まっている。現在、新潟大学における第2期のロシア語ベーシック II の教科書であり、全国の他の多くの大学でも使われている桑野隆『はじめてのロシア語』（白水社、第2版、1993年）を例にとれば、5回の授業で説明できるのは、多めに見積もっても、(1)ロシア語の文字と発音、(2)ロシア語のアクセント、(3)綴り字と発音の例外2つ（アクセントのないoと、アクセントのないeおよびяの発音）、(4)「AはBです」という基本的な平叙文、およびそれに類する疑問文、否定文、(5)名詞の性、(6)動詞の不定形と現在人称変化、(7)子音の同化、

(8)名詞の複数形、(9)「私の」「きみの」といった所有代名詞、程度であると思われる（実際には5回ではこれだけ進めないことも多い）。外国語ベーシック I にしても、この枠組みから、あまり大きく逸脱することはもちろんできない。

しかしながら、外国語ベーシック I での5回のロシア語講義で、(1)から(9)にいたる事項を順番に教え、あとは簡単な文化紹介をするだけでよいかという疑問が残る。第2期に引き続きロシア語ベーシック II を履修する学生であればこれでよいかもかもしれないが、先に述べた「週1回の外国語ベーシック I だけで初修外国語の学習を終える学生が、各外国語につき5回の授業だけで、その外国語について学んだ意義があったと思わせるような講義」という目的は、これではどうも達成できないと考えられるからである。もちろん、このような目的はそもそも非現実的であるという考え方もあり得るが、ロシア語においては、少しでもこの目的に近づくべく、以下のような工夫をしている。

(i)ロシア文字の暗記の強制：かなりの苦痛を伴うこの作業を全受講生に強いることは、一見すると、「言語と文化の概観」というこの授業の趣旨から外れるようにもみえるが、筆者はこの過程を重視している。ロシア語に限らず、初修外国語に対する学生の学習意欲を阻害する要因として、その「入り口の敷居の高さ」が挙げられる。ロシア語の文字はその代表的なものであり、必要以上にロシア語が敬遠される大きな理由になっている。しかしながら、文字という敷居を克服してはじめて、ドイツ語やフランス語と共通の水準でロシア語の言語と文化を考えることができる。「3外国語を比較し相対化する視点を身につける」というこの授業の趣旨を達成するためには、ある程度の強制はやむを得ない。

(ii)他外国語との比較：現状の外国語ベーシック I の枠組みでは、ロシア語はドイツ語、フランス語と組み合わせられている。この三外国語の比較は、学生の知的関心を喚起するためにも有益である。筆者の授業では、ドイツ語、フランス語、ロシア語の3外国語は、そもそも同じインド＝ヨーロッパ語族でありながら、後の歴史のなかで分化していったゲルマン語族、ロマンス語族、スラヴ語族にそれぞれ属していること、ドイツ語とロシア語では名詞の性は3つ、フランス語では2つであること、同じ「本」を表す単語にしても、ドイツ語Buchは中性、フランス語livreは男性、ロシア語книгаは女性であるといったように違いがみられることなどを説明している。このような説明は従来の初級外国語の授業の枠内ではあまりなされてこなかったものであり、三外国語を一度に学ぶという外国語ベーシック I ならではのものであると考えている。

(iii)高度な文法事項の紹介：文法知識を体系的に積み上げていくためには、その教授の順番を勝手に変更することは許されないが、文法知識の積み上げを必ずしも目的とはしていない外国語ベーシックⅠの授業では、通常であればかなり後になってから教えられる高度な事項をあえて初めに扱うことによって、ロシア語という言語の特徴を鮮明に示すことが可能である。このような例として、筆者は授業で、(a)名詞の格変化とその機能、(b)無人称文の二つに触れている。(a)に関しては、例えば「イワンがアンナを愛している」という文をとりあげ、「イワン」と「アンナ」という二つの項の論理的関係を、日本語では「名詞＋助詞」で、英語では語順で示すのに対し、ロシア語では名詞の語尾を格変化させることによって示すこと（「イワン」を主格におき、「アンナ」を対格におく）、その結果、日本語と同じように、ロシア語では語順が比較的自由であること（“Иван любит Анну.”／“Иван Анну любит.”／“Анну любит Иван.”が、すべて英語の“Ivan loves Anna.”とほぼ同義になること）、しかしながら、ロシア語では語順が比較的自由な分、語順によって意味のニュアンスに微妙な違いが出てくること（文末にくる要素に意味の中心がおかれる）、などを説明している。また(b)に関しては、「今日は暑い」という文をとりあげ、“It is hot today.”という英語の文における「天候のit」なる現象が端的に示すように、英語、ドイツ語、フランス語が基本的に「主語－述語」の枠組みをけっして崩そうとしない言語であるのに対し、ロシア語ではСегодня жарко.（逐語訳すれば「今日は、暑い」）というふうに、主語なしで完全な文として成立する場合があること（無人称文）を説明し、「主語－述語」関係の論理性という、しばしば持ち出される議論が、特定のヨーロッパ系言語のみに基づいた視野の狭い議論でしかないことを説明している。これらの説明は、いずれも、従来の初等文法の枠組みにおいては相当進んだ段階でしかなされないものであった（語順によるニュアンスの変化などは、そもそも初等文法では教えられないこともある）。しかしながら、このような点に敢えて触れることで、ロシア語に対する学生の想像力をかきたて、外国語・外国文化全般に対する視野を広げることを期待しているのである。

かつて哲学者のヴィトゲンシュタインは、従来の言語学の誤謬を乗り越えるべく「言語ゲーム」という概念を提起した画期的な書物のなかで、ロシア語では「この石は赤い」という代りに「石赤い」ということを知ったときの驚きについて触れている（『哲学探究』）。初修外国語教育においてわれわれがささやかながら伝えようとしているのも、この「驚き」にほかならない。（番場俊）

3. 見て、聞いて、楽しむ——WEB教材作成の実際

初修外国語インターネット教材作成の経過を振り返りつつ、テキストの作成、撮影、編集・HTML化の三点について、簡単に報告する。

1) テキストの作成

簡単な挨拶や短い会話などを含む教材の雛形を駒形が作成し、外国語担当教員がテキストを作成した。外国語ベーシックⅠで扱われている、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語・スペイン語・イタリア語の7カ国語のテキストが作成され、インドネシア語は担当教員の意向で次年度以降に作成することになった。

各外国語のテキスト作成者は下記の通り（敬称略）；

- ドイツ語：アンニャ・ホップ（大学教育開発センター）
- フランス語：駒形千夏（人文学部）
- ロシア語：番場俊（人文学部）
- 中国語：児玉憲明（人文学部）
- 朝鮮語：藤石貴代（人文学部）
- スペイン語：近知弥子（非常勤）
- イタリア語：猪俣賢司（人文学部）

2) 撮影

テキスト吹き込み者を、上記のテキスト作成者から推薦してもらい、撮影作業を行った。各外国語の吹き込み者は下記の通り（敬称略）；

- ドイツ語：アンニャ・ホップ（大学教育開発センター）、フォークト・ユッタ（学外）、ガブラー・フィリップ（理学部学生）
- フランス語：クロエ・ヴィアト（非常勤）、イアン・メギル（大学教育開発センター）
- ロシア語：ヌルラン（国際センター学生）
- 中国語：カク・エイキョウ（現代社会文化研究科学生）
- 朝鮮語：イ・ヘヨン（学外）、松崎真日（非常勤）
- スペイン語：近知弥子（非常勤）、アルコルタ・ファン・アルフレド（経済学部学生）
- イタリア語：ベルベルシ・マリオ（非常勤）

また実際の撮影に際しては、教育人間科学部の内山渉さんにご協力いただき、録画機材一式を含む教育人間科学部校舎内のスタジオをお貸しいただいた。教材のほぼ全てが当スタジオで撮影されている。

3) 編集・HTML化

ロシア語を齋藤陽一（人文学部）、中国語を児玉憲明（人文学部）、それ以外を駒形が担当した。未完成

の箇所や操作性の向上を、今後、業者に依頼することになっている。また、現在、データは人文学部のサーバにおかれているが、今後頻繁にアクセスがあった場合にサーバに負荷がかかりすぎるかもしれないことが懸念される。情報処理センターに依頼してサーバを移すなどの対策を講ずる必要があるかもしれない。(駒形千夏)

4. おわりに——来年度に向けて

「外国語ベーシック I WEB教材」は、当初、平成17年度の授業での運用を考えていたのだが、すべての外国語でそれを行うことはできなかった。問題となったのは、当初、音声だけと考えていたのを、「発音の際の口の形が見えた方がよい」等といった理由から、映像入りのファイルを用意した。ところが、当然ではあるが、映像が加わることによりファイルが大きくなり、コンピューターが処理するのに時間がかかるようになった。当然、同時に何人も学生が向き合うということが不可能となってしまった。(これにはサーバーの性能という問題もあるのだが。)

またビデオの映像をコンピューターに取り込む際、若しくは、撮影の際に音声が必要でも鮮明に録音されず、聞こえにくいという問題も起こった。音声のみにしておけば、こうした問題は起きなかったと思われるのだが、あとの祭りであった。

そこで、今後は、1) 能力の高いサーバーの設置、2) 映像、もしくは音声のファイル化の際に有効な方法を探るといったことを考慮しつつ、本来の課題、学生が習得することが望ましい表現、或いは、発音の練習のための環境をさらに整えて行きたいと考えている。(齋藤陽一)

【参考】

以下に平成16年7月に外国語ベーシック I で実施したアンケートの一部(自由感想欄)を引用する。このアンケートはすべてのクラスでおこなったが、あまりに長くなるので、番場が担当したドイツ語・フランス語・ロシア語クラスの結果のみとした。必ずしも肯定的な感想ばかりではないが、現状の問題点をほぼ正確に示すものとして、あえて掲載している。

〈第2期にベーシック II の履修を希望した学生の感想〉

・一気に多くの外国語について触れることができたので大変満足している。・入学してすぐにどれかを選べといわれても分からないので、興味のあるものを一通り学べるのはよいと思う。ただ、自分で3つ選びたかった。・いろいろな言葉の特徴を知ることができてよかった。・入学前の語学紹介を詳しくしてほしい。・外国語を始めるにあたって導入講義があるのは賛成です。これで自分が何をしたいのか分かってよかつ

たです。・英語以外の外国語を勉強できて、世界が広がった。・3つの外国語の初歩的な文法だけでなく、その外国語を学ぶ楽しさも理解でき、2期に一つを選ぶ参考になった。・「知る」という意味でとても有意義だった。・前期だけで3か国語勉強できたのでよかった。・基礎ばかりでしたので、気軽にいろいろな言語に触れることができてよかった。・興味が湧いて、逆にどれを選択しようか悩む。・ベーシック I で概要を学んで、その中から必ずベーシック II を選ぶのならこの授業はとて意味のあるものだと思うが、ベーシック I だけで初修外国語を終えてしまっはベーシック I の導入はあまり意味のないものと思う。・最初から3つの組み合わせが決まっているより、すべて自分で選べるとよかった。・授業の内容について；発音や名詞の用法なども大事だと思いますが、ベーシック II を受けるための下敷きにしたいので、簡単な挨拶や文化などをやってほしかったです。

〈ベーシック I で終了することを希望した学生の感想〉

自分の興味のもてる外国語を見極めるのに重要な機会だ。・導入講義だと思っていたのに、わりと深くまで入ったように感じたので、すこし難しかった。・それぞれ5時間ずつだったので物足りない感じがする。2期に渡った講義構成ならもっといろいろ学べると思う。・いろいろな未知の文化に触れることができてとても楽しかったです。もっとその国のこと(生活など)を教えてくださいると興味を持つことができると思います。・受講者数が多すぎる。・進度が速かった。・様々な外国語に少しだけであるが触れることができたのはいい経験になった。また、後期に1つの外国語を選んで履修する人にとっては、複数の外国語を少しずつ学んだ上で自分に合った外国語を選べるので良いと思う。・最初はどのような言語か分からなかったのでベーシックを選んだが、実際5回だけの授業ではかえって頭が混乱し、結局何も残らなかったような気がする。・広く、浅く学んだ方がいいと思うし、このままでいいと思う。・外国語の選択にすごく迷ったが、ベーシック I では3つまで選べてよかった。しかしすべて似たような外国語が一緒だった。本当はドイツ語とフランス語と中国語を知りたかったので、もっとコースを多くしてほしい。・外国語はドイツ・フランスなど中途半端にやるより英語をみっちり勉強したいと思いました。・ロシア語はとても楽しかったです。後期にロシア語を取りたかったのですが、必修(英語)と重なってしまい、取れません。とても残念です。

〈第2期にどうするか「未定」と答えた学生の感想〉

三か国語を一気に学べて得した気分だ。・少しずつ三か国語を学習してから、その中から一つ選べるのはいい方法だと思う。・それぞれ似たところがあったり全然違うところがあったり、比べられてよかった。・私にと

でもあった。・どの先生もおもしろい先生だった。・この講義はベーシックⅡをとるにあたってとても参考になる。・もっと組み合わせを多くして。・3つは多いと思います。せめて興味のある2つを自由に（独、朝とか）選べれば楽しく学習できたと思います。・3カ国語を学ぶことができうれしいのですが、5回の講義

では簡単なことしか学べず、あまり身に付いた気がしない。・ベーシックⅡを履修すると週3回になるのは大変すぎるので、週2回にしてほしい。・科目によって、発音を重視したり、会話を重視したり、文法を重視したりでバラバラだった。・この講義がないと触れることのできないロシア語を学べてよかった。